

# 巻 頭 言

## エッセー 学びのライフスタイル は 人間観生命観の変遷からくる

人間の本質を知ろうとして、学問社会が成立する。大学研究機関は研究とその行政に携わる人も含めて新旧世代の価値観を抱え込みつつその時代の学の共同社会を形成している、と研究員同志自覚していた。最近ある仲間と次のような話をし始めていた。

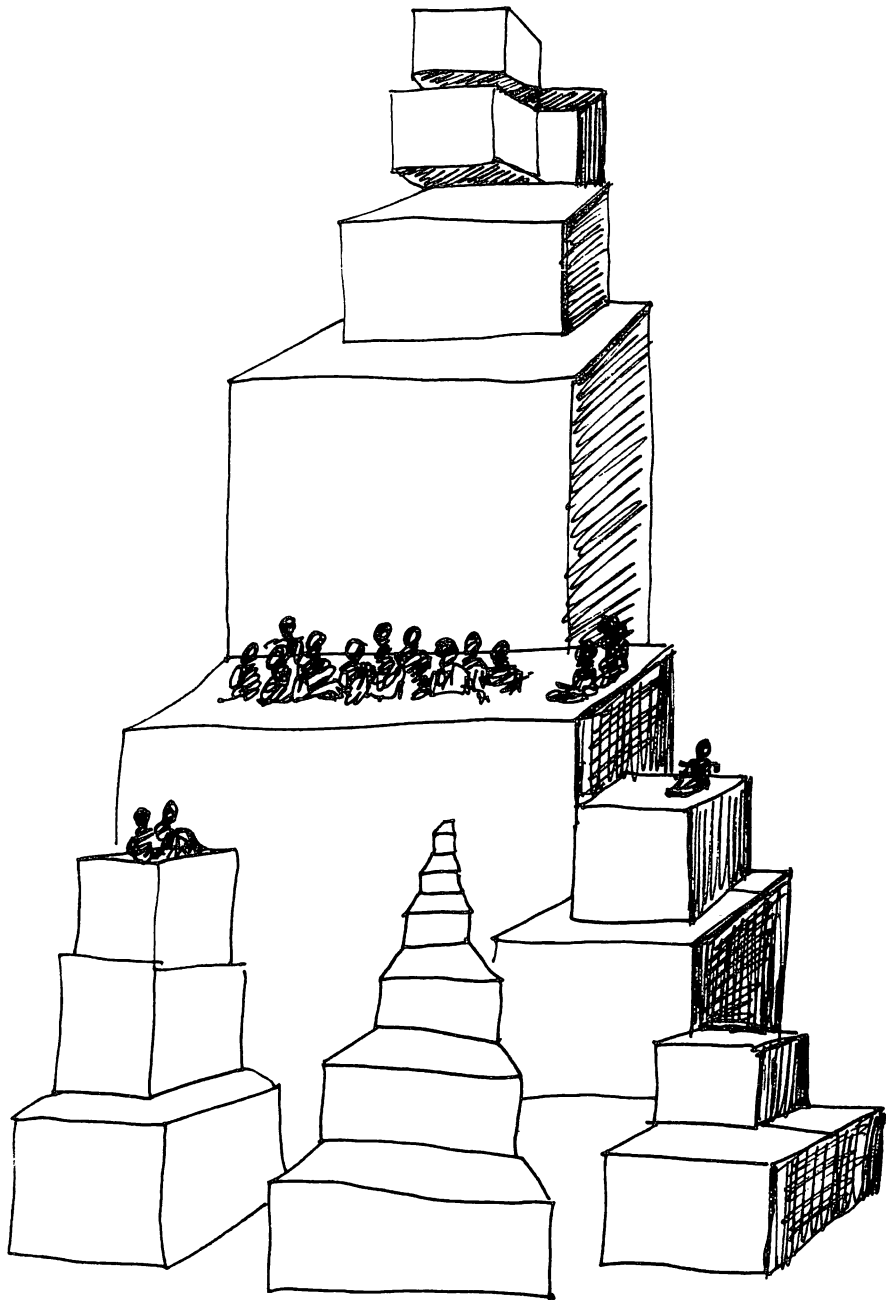
人間のあり方をめぐって「関わり」relations という目で学問していこうとする営みはそう古い歴史があるのでなく、むしろ現代20世紀にいる私達の世代の学際的試みである。「存在」being という視点を柱に人間の本質は「human being」であると表記してみると、英語では人間のことを「人間的存在」、もしくは語源で推測するとhu=色、man=人なので「色々なひとがいる」という捉え方が見えてくる。「いる」「ある」「存在 being」と言う哲学的視点が人間研究の中心的課題だった（あえて過去形でいわせてもらう）。

では、ここで あえて人間の本質は「human relations」であると表記してみよう。これは仮説であり大胆発言であり、そして体験学習方式による体験から始まる人間存在の仮説化の大前提でもあるのである。人間関係科の研究教育活動の特徴は、従来の近代学問の人間観をふまえながらも、神学教育・キリスト教教育・人間観教育の新しい視点として、この「関係を生きる人間」をもって「人間を人間 human beings とみなす」という厳しくも現代的にしてアクティブな生き方の課題がはらまれている。

古い人間観で生きる社会・家庭・グループもあれば、新しい人間観創りの取り組みに生きる人間社会・家族・グループ組織もある。この人間関係研究センターや人間関係科（高等教育機関の一学科体制）は「関わりを生きようとする人間意識同志の学習研究共同体 learning community となりの、change agent として社会（人々）に問いかけ仲間創りをしている。25年間の教育研究プロセスを生きている共有研究者及び学生による人々の共同体のあり方は、日本における人間学探究の途上に於ても、大学もしくは高等教育機関での「学」の新たな社会システムづくりと現代人の意識の自由解放の場づくりが、模索されているように思えてならない。伝統的キリスト教信仰神学生活においては修道生活という宗教者の人間観が制度化され、その時代のライフスタイルとして保護されたように。

人間関係研究という名のもとに集う授業学生講座生教員スタッフの公私に渡る思索と実践行動や生活そのものがポストモダンなパラダイムシフト、脱近代要素還元主義分析型階層管理社会時間能率主義という現代の構造化とその問題を越える次世代への発想転換への「生みの苦しみや様々な歴史」という学のプロセスなのだろう。さらに人間の体質は「human life」であると表記すると、いのちという目で現代の Science（学問・科学）や人間観やライフスタイルが見直される世紀が見えてくる。

（まどか Assemat 蛭田庸代）



イラストはNLTトレーナー Tobe Reisel の作品



センターはキリスト教的人間観に立って、広く学際的・行動科学的に人間・人間関係の研究および研修を行うことを目的とする。

この目的を達成するために次の事業を行う。

- 人間・人間関係に関する研究と教育の推進
- センターと目的を共通にする学外研究機関との協力
- 研究会・研修会等の開催，個別的相談・指導・援助
- 研究成果の刊行，文献・資料の蒐集と一般への公開